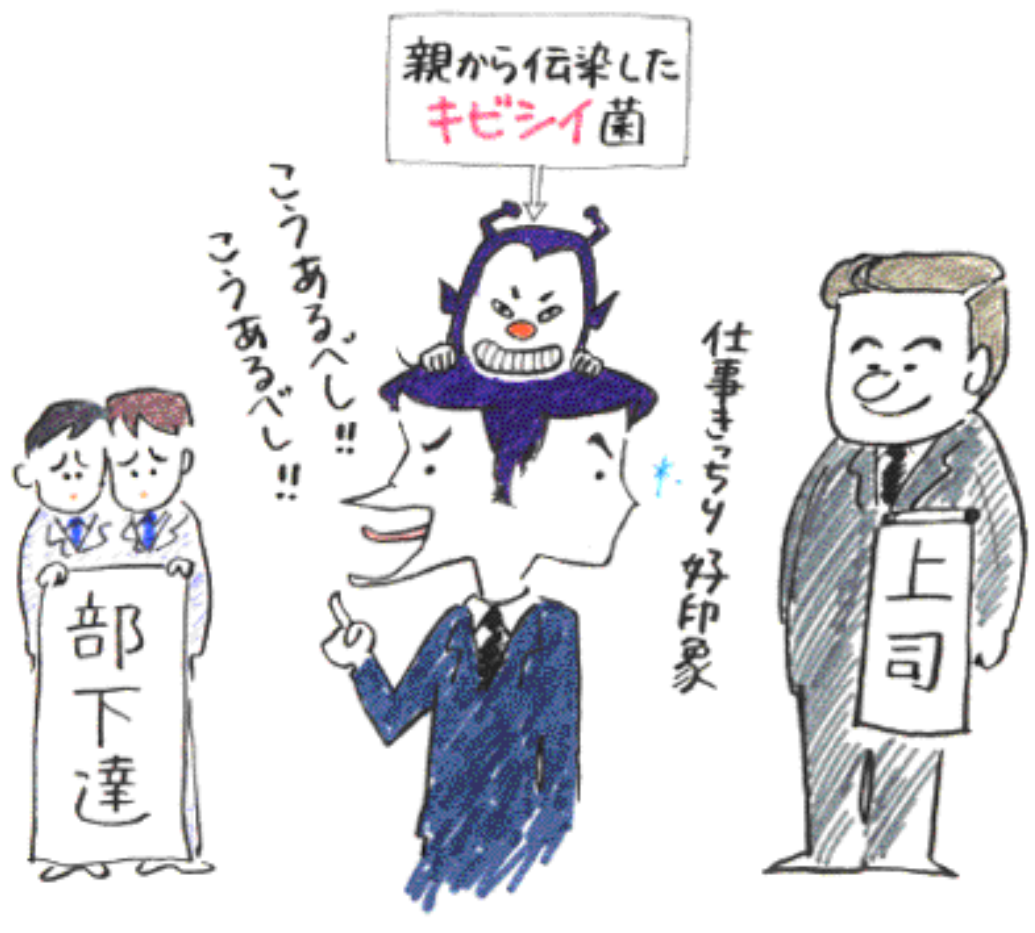


お気楽
精神科医の
頑張りな
人生のスヌ

第十二話

心の伝染病

福島 淳 イラスト・福島マルゲリータ



世の中には、色々な形で他人をいじめ
る大人たちがいる。礼儀作法を教えるな
ど教育的配慮という形をとったり、重箱
の隅をつつくように些細なことではち
ち文句をつける姑タイプもいる。教えて
いるつもりの方は、悪意のある場合もあ
るだろうが、たいていはある種の「しつ
け」をしている気なので、あくまで善意
だ。特に日本人は皆と一緒でないとダメ
精神で「出る杭は打つ」傾向にあり、職
場などの社会においての足の引っ張り合
い、いじめ、陰口は陰湿である。ここに
ごめく「ねたみ、そねみ」はただならぬ
ものがある。

一方、いじめの対象となる側にも、それ
なりに、いじめにあう理由はある。それ
「いじめられる人」は、他人の機嫌に過剰
に反応しがちな、皆に好かれたい八方美
人タイプ、または、自分の方が悪いと思
い込む自虐的なタイプの人達が多いと言
えるかもしれない。特に、前者のタイプは、
いじめてくる相手にさえ「自分は好かれ
るはず」と無駄な努力をくり返し、その
都度ストレスをためるのである。つまりこ
ういう人は、自己評価が高く「私はいい人
間」と思いすぎているわけで、見方を換
えれば、自分の方にも問題があることが
見えていない場合も少なくない。つまり、
そこを見抜いた人が、八方美人を攻撃す
るのである。

また「心のカガミ」という意味で、人は
自分の持っている欠点を他人の中に見つ
けた時、その欠点を認めたくないために、
「あの人は嫌い」のスイッチが入るとい
うのは以前にも述べた通り。運悪く「い
じめる人」として「いじめられる人」が
当たりやすいタイプであると、いじめが
始まる可能性もある。いじめる人は、あ
たりかまわず全ての人をいじめるのでなく、
いじめやすい人にあたるのである。いじ
める人、言い換えればイライラする人にと
っては、いじめられる人こそイライラさせ
る人なのだ。

ではここで、いじめる人が何故そう
なってしまうのか、考えてみよう。「いじ
める」タイプの性格を持つ人の中には、
育てられ方が大きく関係している場合
が多い。養育してくれた両親から「伝染
」してきていると言っても過言ではない。
その両親も虐待するつもりで厳しくい
じめるように育てたのではないだろう。彼
らなりに育児、教育といった面で理想を
大きく掲げ、「こうあるべし」とその子供
を育てたのに違いない。しかし本人には、
表面的には単に厳しい教育をされたとし
か思われず、心に傷を受けたという事
のみ植え付けられ、その裏に存在する
愛情を間違った形で受け止めてしま
うのである。

(もちろん、反面教師という言葉もある
ように、すべての場合がこうなるとは限
らないが)

例えば、理想論を現実の世界に持ち込
み、自分が正しいと信じていることを、無
理やりにも押しとつそうとする融通の利
かない人が、案外職場や社会で部分的に
ではあるが、評判が良かったりする場合
がある。当然、仕事上のことであれば、書
類の書き間違いがないとか、相手先との待
合わせの時間をキッチリ守るといった自
分にも厳しい面があるため、そのミスのない



先生：
犬となればりも
争ってどうするんですか

まじげい

仕事振りは上司から高い評判を得ている。ところがそんな人物に限って、部下に対してはちよつとした遅刻やミスさえ責め立てるのである。これは、まさしく本人が子供の時に、親から非常に厳格なしつけを受けたのと同じことを、部下に対して繰り返していると言えよう。

また、別の視点から見て、こういつた虐待に近い教育を受けた人は、その時に感じていた「両親から見捨てられるのではないか」という不安がある為に、上の立場にある人（権力を持つ人）には、できるだけ目をかけてもらおうと取り入る努力をするのである。つまり、親の愛情を求めて卑屈になればなるほど、下の立場にいる人に対して、かつて両親から厳しくされたように表面的には「教育するつもり」ではあるが、現実にはいじめを繰り返すことになる。愛情といじめが一つの組み合わせになっているために、この上司と部下という2人は、近づけば近づくほどいじめられるという関係が強化されることになるだろう。

では、こんな人物が親となつた場合を考えてみよう。どういふことになるか、簡単に想像がつく。かつて自分が受けてきた育てられ方を、育て方の見本として我が子を教育するのである。勿論、その子供の生まれながらの素質も大きく影響するだろうから、もし打たれ強い性格に生まれついでいけば、上手に乗り切るかもしれない。しかし大多数の場合、しつけを受けているように見えて、実は虐待に近い教育を受けてしまうことになるのである。その結果、この子供は親と同じような性格

スタイルを持った大人に育ってしまうというわけだ。これは、上から下へ、世代をかけたある種の伝染病と言つても良いのではないだろうか。

ここで余談だが、「犬のオシッコ」という行為を取り上げてみたい。親子の心の伝染病とはまた別の話だ。私は特に動物の行動学に詳しいわけではないのだが、犬が電柱に自分のオシッコをかけるのは、その匂いで自分のテリトリーを他者（他の犬？）に示すマーキング（マーキング）行為ととらえている。実は、これは犬世界に限らず、我々人間の世界でも頻繁に見られる行為である。

どの世界でもそうだろうが、新参者に対して意味のないいじめはいつの時代にもあるようだ。ゼロから何かを生み出すのは大変だが、出来上がったものを批判したり、修正したりするのは比較的簡単である。例えば、上の立場の人間が、部下のした事を「ちよいちよい」と修正することで、「自分のほうが上」「教えてやる」という形をとって縛張りを示すことができる。つまり、この「ちよいちよい」「こそがオシッコ」なのだ。

誤解がないように念を押すが「ちよいちよい」には、とてもありがたい重要な修正もある。全部が全部オシッコというわけではない。但し、ありがたいオシッコ、ただのオシッコの判別は、難しい。いじめられた人には「やり返す」という手段もあるが、「ありがたいオシッコ」にやり返すと自分が損をする。「ただのオシッコ」には是非に反撃をおススメするが、短気は損気なので要注意。